

悲しき玩具

石川啄木

悲しき玩具

(一握の砂以後)

石川啄木

一(四十三年十一月末より)一

内容

一握の砂以後百九十四首(歌)

一利己主義者と友人との対話(感想)

歌のいろいろ(感想)

悲しき玩具

一 一握の砂以後 一

1

い き
呼吸すれば、
むね うち おと
胸の中にて鳴る音あり。
こがらし おと
凧 よりもさびしきその音！

2

め と
眼閉づれど、
こころ なに
心にかぶ何もなし。
さびしくも、また、眼を^めあけるかな。

3

とちう き かは
途中にてふと気が変り、
さき やす け ふ
つとめ先を休みて、今日も、
かし
河岸をさまよへり。

4

の ど
咽喉がかわき、
お くだものや さが ゆ
まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ。
あき よ
秋の夜ふけに。

5

あそ で こども
遊びに出て子供かへらず、
と だ
取り出して
はし み おもちや きかんしゃ
走らせて見る玩具の機関車。

6

ほん か ほん か
本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
つま い
妻に言ひてみる。

7

たび おも をつと ころ
旅を思ふ夫の心！
しか な つまこ ころ
叱り、泣く、妻子の心！
あさ しょくたく
朝の食卓！

8

いへ で ちやう
家を出て五町ばかりは、
よう ひと
用のある人のごとくに
ある
歩いてみたれど

9

いた は
痛む歯をおさへつつ、
ひ あかあか
日が赤赤と、

ふゆ もや なか み
冬の霜の中にのぼるを見たり。

10

いつまでも歩いてみねばならぬごとき
ある
おも わ き
思ひ湧き来ぬ、
しんや まちまち
深夜の町町。

11

なつかしき冬の朝かな。
ふゆ あさ
ゆ
湯をのめば、
ゆげ かほ
湯気がやはらかに、顔にかかれり。

12

なん
何となく、
け さ すこ ころあか
今朝は少しく、わが心明るきごとし。
て つめ き
手の爪を切る。

13

うつとりと
ほん さしゑ なが
本の挿絵に眺め入り、
たばこ けむりふ
煙草の煙吹きかけてみる。

14

とちう のりかへ でんしや
途中にて乗換の電車なくなりしに、
な おも
泣かうかと思ひき。
あめ ふ
雨も降りてみき。

15

ふたばん
二晩おきに、
よ じごろ きりどほし さか のぼ
夜の一時頃に切通の坂を上りしも一
つと
勤めなればかな。

16

しつとりと
さけ
酒のかをりにひたりたる
なう おも かん かへ
脳の重みを感じて帰る。

17

け ふ さけ
今日もまた酒のめるかな！
さけ
酒のめば
むね くせ し
胸のむかつく癖を知りつつ。

18

なにごと いまわれ
何事か今我つづやけり。
おも
かく思ひ、
め ゑ あぢは
目をうちつづり、酔ひを味ふ。

19

ゑ ここち
すつきりと酔ひのさめたる心地よさよ！
よなか お
夜中に起きて、
すみ す
墨を磨るかな。

20

まよなか でまど い
真夜中の出窓に出でて、
らんかん しも
欄干の霜に
てさき ひ
手先を冷やしけるかな。

21

かつて
どうなりと勝手になれといふごとき
わがこのごろを
おそ
ひとり恐るる。

22

て あし
 手も足もはなればなれにあるごとき
 ねざめ
 ものうき寝覚！
 ねざめ
 かなしき寝覚！

23

あさ あさ
 朝な朝な
 な
 撫でてかなしむ、
 した ね ほう もも
 下にして寝た方の腿のかるきしびれを。

24

あらの きしや
 曠野ゆく汽車のごとくに、
 このなやみ、
 われ ころ とほ
 ときどき我の心を通る。

25

く に しんぶん
 みすぼらしき郷里の新聞ひろげつつ、
 ごしよく
 誤植ひろへり。
 け さ
 今朝のかなしみ。

26

たれ われ
 誰か我を
 おも ぞんぶんしか ひと おも
 思ふ存分叱りつくる人あれと思ふ。

なん　こころ
何の心ぞ。

27

なに
何がなく
はつこひひと
初恋人のおくつきに詣づるごとし。
こうぐわい　き
郊外に来ぬ。

28

なつかしき
こきやう　おも
故郷にかへる思ひあり、
ひさ　ぶ　きしや　の
久し振りにて汽車に乗りしに。

29

あた　あ　す　きた　しん
新しき明日の来るを信ずといふ
じぶん　ことば
自分の言葉に
うそ
嘘はなけれどー

30

かんが
考へれば、
ほん　ほ　おも　あ　な
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
きせる
煙管をみがく。

31

け ふ やま こひ
今日ひよいと山が恋しくて
やま き
山に来ぬ。
きよねんこしか いし
去年腰掛けし石をさがすかな。

32

あさね しんぶん よ ま
朝寝して新聞読む間なかりしを
ふさい
負債のごとく
け ふ かん
今日も感ずる。

33

て
よごれたる手をみる一
ちやうど
ごろ じぶん こころ むか
この頃の自分の心に対ふがごとし。

34

て あら とき
よごれたる手を洗ひし時の
まんぞく
かすかなる満足が
け ふ まんぞく
今日の満足なりき。

35

としあ ころ
 年明けてゆるめる心！
 うつとりと
 こ かた わす
 来し方をすべて忘れしごとし。

36

きのふ あさ ばん は
 昨日まで朝から晩まで張りつめし
 あのころもち
 わす おも
 忘れじと思へど。

37

と も は ね っ おと
 戸の面には羽子突く音す。
 わら こゑ
 笑ふ声す。
 きよねん しやうぐわつ
 去年の正月にかへれるごとし。

38

なん
 何となく、
 ことし こと
 今年はいい事あるごとし。
 ぐわんじつ あさ は かせな
 元日の朝、晴れて風無し。

39

はら そこ あくび
 腹の底より欠伸もよほし
 ながながと欠伸してみぬ、
 ことし ぐわんじつ
 今年の元日。

40

とし
 いつの年も、
 に うた
 似たよな歌を二つ三つ
 ねんが ふみ か とも
 年賀の文に書いてよこす友。

41

しやうぐわつ か
 正月の四日になりて
 ひと
 あの人の
 ねん ど はがき き
 年に一度の葉書も来にけり。

42

よ こと かんが
 世におこなひがたき事のみ考へる
 あたま
 われの頭よ！
 ことし
 今年もしかるか。

43

ひと
 人がみな
 おな ほうかく む ち
 同じ方角に向いて行く。

それを横よこよりみ見てこころゐる心。

44

いつまでか、
この見み飽あきたる懸額かけがくを
このまま懸かけておくことやらむ。

45

ぢりぢりと、
蠟燭ろうそくの燃もえつくるごとく、
夜よるとなりたる大晦日おほみそかかな。

46

あをぬり せ と ひばち
青塗あをぬりの瀬戸せとの火鉢ひばちによりかかり、
眼め閉とぢ、眼めを開あけ、
時ときををし惜をしめり。

47

なん あ す こと
何なんとなく明日あすはよき事ことあるごとく
思おもふ心こころを
叱しかりて眠ねむる。

48

す
過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
ぐわんじつ
元日といふに
ねむ
うとうと眠し。

49

それとなく
よ
その由るところ悲しまる、
ぐわんじつ ごご ねむ ところ
元日の午後の眠たき心。

50

ぢつとして、
みかん
蜜柑のつゆに染まりたる爪を見つむる
ころ
心もとなさ！

51

て う
手を打ちて
ねむけ へんじ
眠気の返事きくまでの
そのもどかしさに似たるもどかしさ！

52

やみがたき^{よう わす き}用を忘れ来ぬ一
とちう^{くち い}途中にて口に入れたる
ゼムのためなりし。

53

すつぽり^{ふとん}と蒲団をかぶり、
あし^{あし}足をちぢめ、
した^{だ たれ}舌を出してみぬ、誰にともなしに。

54

いつしかに^{しやうぐわつ す}正月も過ぎて、
わが^{くらし}生活が
また^{みち きた}もとの道にはまり来れり。

55

かみさま^{ぎろん な}神様と議論して泣きし一
あの^{ゆめ}夢よ！
か^{まへ あさ}四日ばかりも前の朝なりし。

56

いへ ^{じかん}
家にかへる時間となるを、
^ま
ただ一つの待つことにして、
^{け ふ はたら}
今日も働けり。

57

^{ひと おも}
いろいろの人の思はく
はかりかねて、
^{け ふ く}
今日もおとなしく暮らしたるかな。

58

^{も しんぶん しゆひつ}
おれが若しこの新聞の主筆ならば、
^{おも}
やらむ一と思ひし
^{こと}
いろいろの事！

59

^{いしかり そらちごほり}
石狩の空知郡の
^{ぼくちやう よめ おく き}
牧場のお嫁さんより送り来し
バタかな。

60

^{ぐわいとう えり あご うづ}
外套の襟に頤を埋め、
^{よ たち き}
夜ふけに立どまりて聞く。

よく似た^に声^{こゑ}かな。

61

Yといふ^{ふてふ}符牒、
 ふるにつ^きし^{しよ}しよ
 古日記の^に処^{じこ}にありー
 Yとはあ^{ひと}の^{こと}人の事なりしかな。

62

ひやくせう ^{おほ} ^{さけ}
 百姓の多くは酒をやめしといふ。
 もつと^{こま}困らば、
 なに
 何をやめるらむ。

63

め ^す ^{こころ}
 目さまして直ぐの心よ！
 とし ^{いへで} ^{きじ}
 年よりの家出の記事にも
 なみだい
 涙出でたり。

64

ひと ^{こと}
 人とともに事をはかるに
 てき
 適せざる、
 せいかく ^{わも} ^{ねぎめ}
 わが性格を思ふ寢覚かな。

65

なに
何となく、
あんぐわい おほ き
案外に多き気もせらる、
じぶん おな おも ひと
自分と同じこと思ふ人。

66

じぶん としわか ひと
自分よりも年若き人に、
はんいち きえん は
半日も気焰を吐きて、
こころ
つかれし心！

67

めづ け ふ
珍らしく、今日は、
ぎくわい ののし なみだい
議事を罵りつつ涙出でたり、
おも
うれしと思ふ。

68

ぼん さ
ひと晩に咲かせてみむと、
うめ はち ひ あぶ
梅の鉢を火に焙りしが、
さ
咲かざりしかな。

69

あやまちちやわんて茶碗をこはし、
 物のきもちこはす気持のよさを、
 けさおも
 今朝も思へる。

70

ねこみみひ
 猫の耳を引つぱりてみて、
 にやと啼なけば、
 びつくりして喜よろこぶ子供こどもの顔かほかな。

71

な ぜ
 何故かうかとなさけなくなり、
 よわ ころ なんと しか
 弱い心を何度も叱り、
 かね ゆ
 金かりに行く。

72

ま ま
 待てど待てど、
 く はづ ひと こ ひ
 来る筈の人の来ぬ日なりき、
 つくへ ぬち こ こ か
 机の位置を此処に変へしは。

73

ふるしんぶん
古新聞！

おやここにおれの歌の事を嘗めて書いてあり、
二三行なれど。

74

ひつこ あさ あし お
引越しの朝の足もとに落ちてみぬ、
をんな しやしん
女の写真！
わす しやしん
忘れぬし写真！

75

ころ き
その頃は気もつかざりし
かな おほ
仮名ちがひの多きことかな、
むかし こひぶみ
昔の恋文！

76

はちねんぜん
八年前の
いま つま てがみ たば
今のわが妻の手紙の束！
どこ しま き
何処に蔵ひしかと気にかかるかな。

77

ねむ くせ
眠られぬ癖のかなしさよ！
すこしでも

ねむけ
眠気がさせば、うろたへて寝る。

78

わら わら
笑ふにも笑はれざりき一
なが さが
長いこと捜したナイフの
て うち
手の中にあるに。

79

ねん
この四五年、
そら あふ ど
空を仰ぐといふことが一度もなかりき。
かうもなるものか？

80

げんかうし
原稿紙にでなくては
じ か
字を書かぬものと、
しん わ こ
かたく信ずる我が児のあとけなさ！

81

こんげつ ぶ じ く
どうかかうか、今月も無事に暮らしたりと、
ほか よく
外に欲もなき
みそか ばん
晦日の晩かな。

82

あの頃はよく嘘を言ひき。
平気にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

83

古手紙よ！
あの男とも、五年前は、
かほど親しく交はりしかな。

84

名は何と言ひけむ。
姓は鈴木なりき。
今はどうして何処にゐるらむ。

85

生れたといふ葉書みて、
ひとしきり、
顔をはれやかにしてゐたるかな。

86

そうれみろ、

あの人ひとも子こをこしらへたと、
何なにか気きの済すむ心地こちにて寝ねる。

87

『石川いしかははふびんやつな奴やつだ。』
ときにかう自分じぶんで言いひて、
かなしみてみる。

88

ドアお推おしてひと足あし出れば、
病人びやうにんの目めにはてもなき
ながらうか
長廊下ながらうかかな。

89

重いおも荷にを下おろしたやうな、
気持きもちなりき、
この寝台ねだいの上うへに来ていねしとき。

90

い の ち ほ
そんならば生命が欲しくないのかと、
い し や い
医者にはかれて、
こ ころ
だまりし心！

91

ま よ な か め
真夜中にふと目がさめて、
な
わけもなく泣きたくなりて、
ふ と ん
蒲団をかぶれる。

92

は な へ ん じ
話しかけて返事のなきに
み
よく見れば、
な と な く わ ん じ や
泣いてゐたりき、隣りの患者。

93

び や う し つ ま ど
病室の窓にもたれて、
ひ さ じ ゅ ん さ み
久しぶりに巡査を見たりと、
よろこべるかな。

94

は ひ
晴れし日のかなしみの一つ！
び や う し つ ま ど
病室の窓にもたれて

たばこ あぢは
煙草を味ふ。

95

よる ど こ へや さは
夜おそく何処やらの室の騒がしきは
ひと し
人や死にたらむと、
いき
息をひそむる。

96

みやく かんごふ て
脉をとる看護婦の手の、
ひ
あたたかき日あり、
かた ひ
つめたく堅き日もあり。

97

びやうあん い はじ よる
病院に入りて初めての夜といふに、
ねい
すぐ寝入りしが、
ものた
物足らぬかな。

98

なに じぶん ひと
何となく自分をえらい人のやうに
おも
思ひてゐたりき。
こども
子供なりしかな。

99

ふくれたる^{はら}腹^なを撫でつつ、
びやうあん^{ねだい}病院の寝台に、ひとり、
かなしみてあり。

100

め日さませば、からだ^{いた}痛くて
うご動かれず。
な泣きたくなりて、よあ^ま夜明くるを待つ。

101

ねあせで
びつしよりと盗汗出てゐる
あけがたの
まだ^さ覚めやらぬ^{おも}重きかなしみ。

102

ぼんやりとした^{かな}悲しみが、
よ夜となれば、
ねだい^{うへ}寝台の上にそつと^き来て^の乗る。

103

びやうめん まど
病院の窓によりつつ、
いろいろの^{ひと}人の
げんき ある なが
元気に歩くを挑む。

104

まへ しんてい みとど
もうお前の心底をよく見届けたと、
ゆめ ははき
夢に母来て
な
泣いてゆきしかな。

105

おも ぬす ごと
思ふこと盗みきかるる如くにて、
むね ひ
つと胸を引きぬー
ちやうしんき
聴診器より。

106

かんごふ てつや
看護婦の徹夜するまで、
やま
わが病ひ、
ねが
わるくなれとも、ひそかに願へる。

107

びやうあん き
病院に来て、
つま こ
妻や子をいつくしむ
まことのわれ
我にかへりけるかな。

108

うそ おも
もう嘘をいはじと思ひき一
け さ
それは今朝一
いま うそ
今また一つ嘘をいへるかな。

109

なん
何となく、
じぶん うそ ごと おも
自分を嘘のかたまりの如く思ひて、
め
目をばつぶれる。

110

いま
今までのことを
うそ
みな嘘にしてみれど、
こころ なぐさ
心すこしも慰まざりき。

111

ぐんじん い だ
軍人になると言ひ出して、
ちちはは
父母に

くろう むかし われ
苦勞させたる昔の我かな。

112

うつとりとなりて、
けん うま おの すがた
剣をさげ、馬にのれる己が姿を
むね 衆が
胸に描ける。

113

ふぢさは だいぎし
藤沢といふ代議士を
おとうと おも
弟のごとく思ひて、
な
泣いてやりしかな。

114

なに
何か一つ
おほ あくじ
大いなる悪事しておいて、
し かほ きもち
知らぬ顔してみたき気持かな。

115

ぢつとして寝ていらつしやいと
こども
子供にでもいふがごとくに
いしや ひ
医者はいふ日かな。

116

へうのう ^{した}
氷囊の下より
^{ひか}
まなこ光らせて、
^ね ^{よる} ^{ひと}
寝られぬ夜は人をにくめる。

117

はる ^{ゆき} ^ふ
春の雪みだれて降るを
^{ねつ} ^め
熱のある目に
^い
かなしくも眺め入りたる。

118

にんげん ^{さいだい}
人間のその最大のかなしみが
これかと
^め
ふつと目をばつぶれる。

119

くわいしん ^{いしや} ^{おそ}
回診の医者の遅さよ！
^{いた} ^{むね} ^て
痛みある胸に手をおきて
^め
かたく眼をとづ。

120

いしや かほいろ み ほか
医者の顔色をぢつと見し外に
なに み
何も見ざりき一
むね いた つの ひ
胸の痛み募る日。

121

や ころ よは
病みてあれば心も弱るらむ！
さまさまの
な むね
泣きたきことが胸にあつまる。

122

ね よ ほん おも
寝つつ読む本の重さに
つかれたる
て やす もの おも
手を休めては、物を思へり。

123

け ふ
今日はなぜか、
ど ど
二度も、三度も、
きんがわ とけい ひと ほ おも
金側の時計を一つ欲しと思へり。

124

ぜ ひ だ おも ほん
 いつか是非、出さんと思ふ本のこと、
 へうし
 表紙のことなど、
 つま かた
 妻に語れる。

125

むね
 胸いたみ、
 はる みぞれ ふ ひ
 春の霰の降る日なり。
 くすり む ふ め
 薬に噎せて、伏して限をとづ。

126

いろ
 あたらしきサラダの色の
 うれしさに
 はし み み
 箸とりあげて見は見つれども一

127

こ しか こころ
 子を叱る、あはれ、この心よ。
 ねつたか ひ くせ
 熱高き日の癖とのみ
 つま おも
 妻よ、思ふな。

128

うんめい き の
 運命の来て乗れるかと
 うたがひぬ一

ふとん おも よ は ね ざ
蒲団の重き夜半の寝覚めに。

129

たへがたき^{かわ おほ}渴き覚ゆれど、
て
手をのべて
りんご ひ
林檎とるだにもものうき日かな。

130

へうのう ^{ぬく}
氷嚢のとけて温めば、
おのづから^め目が^{きた}さめ来り、
^{いた}
からだ痛める。

131

ゆめ ^{かんこどり} ^き
いま、夢に閑古鳥を聞けり。
^{かんこどり} ^{わす}
閑古鳥を忘れざりしが
かなしくあるかな。

132

ふるさとを^い出でて^{いつとせ}五年、
^{やまひ}
病をえて、
^{かんこどり} ^{ゆめ}
かの閑古鳥を夢にきけるかな。

133

かんこどり

閑古鳥一

しづたみむら　さんさう　はやし
 渋民村の山莊をめぐる林の
 あかつきなつかし。

134

てら　ほとり
 ふるさとの寺の畔の

き
 ひばの木の

き　な　かんこどり
 いただきに来て啼きし閑古鳥！

135

みやく

て
 脈をとる手のふるひこそ

かなしけれ一

いしや　しか　わか　かんごふ
 医者に叱られし若き看護婦

136

きおく　のこ
 いつとなく記憶に残りぬ一

かんごふ　て
 Fといふ看護婦の手の

つめたさなども。

137

はづれまで^{いちど}一度ゆきたしと
^{おも}思ひぬし
^{びやうあん}かの病院の^{ながらうか}長廊下かな。

138

^お起きてみて、
^すまた直ぐ^ね寝たく^{とき}なる時の
^{ちから}力なき^め眼に^め愛でし^{チュリツプ}チュリツプ！

139

^{かた}堅く^{にぎ}握るだけの^{ちから}力も^な無くなりし
^わやせし^て我が手の
 いとほしさかな。

140

^{やまひ}わが病の
^よその^{ふか}困るところ^か深く^{とほ}且つ^{おも}遠きを思ふ。
^め目をと^{おも}ぢて思ふ。

141

かなしくも、

やまひ ねが ころわれ あ
病いゆるを願はざる心我に在り。
なん ころ
何の心ぞ。

142

あたら ほ おも
新しきからだを欲しと思ひけり、
しゆじゆつ きづ
手術の傷の
あと な
痕を撫でつつ。

143

くすり わす
薬のむことを忘るるを、
それとなく、
おも ながやまひ
たのしみに思ふ長病かな。

144

ろしあな
ポロオデンといふ露西亜名が、
なぜ
何故ともなく、
いくど おも だ ひ
幾度も思ひ出さるる日なり。

145

われ よ
いつとなく我にあゆみ寄り、
て にぎ
手を握り、

またいつとなく去りゆく人人！

146

とも つま おも
友も妻もかなしと思ふらしー
や なほ
病みても猶、
かくめい くち た
革命のこと口に絶たねば。

147

とほ おも
やや遠きものに思ひし
かな ころ
テロリストの悲しき心も
ちか ひ
近づく日のあり。

148

め
かかる目に
いくたびあ
すでに幾度会へることぞ！
な な いま おも
成るがままに成れと今は思ふなり。

149

つき ゑん あなか
月に三十円もあれば、田舎にては、
らく くら
楽に暮せるとー
おも
ひよつと思へる。

150

け ふ むね いた
今日もまた胸に痛みあり。
し
死ぬならば、
ゆる し おも
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

151

なつ
いつしかに夏となれりけり。
め
やみあがりの目にこころよき
あめ あか
雨の明るさ！

152

や ぐわつ
病みて四月一
かは
そのときどきに変わりたる
あぢ
くすりの味もなつかしきかな。

153

や ぐわつ
病みて四月一
ま なほ め み
その間にも、猶、目に見えて、
こ せたけ
わが子の背丈のびしかなしみ。

154

すこやかに、

せ た け こ み
背丈のびゆく子を見つつ、
ひ ごと な
われの日毎にさびしきほ何ぞ。

155

べ こ すは
まくら辺に子を坐らせて、
か ほ み
まじまじとその顔を見れば、
に
逃げてゆきしかな。

156

こ
いつも子を
おも あひだ
うるさきものに思ひぬし間に、
こ さい
その子、五歳になれり。

157

おや
その親にも、
おや おや に
親の親にも似るなかれ一
な ちち おも こ
かく汝が父は思へるぞ、子よ。

158

かなしきは、

(われもしかりき)

しか う な こ こころ
叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

159

らうどうしや かくめい ことば
「労働者」「革命」などといふ言葉を
き
聞きおぼえたる
さい こ
五歳の子かな。

160

とき
時として、
かぎ こゑ だ
あらん限りの声を出し、
しやうか こ
唱歌をうたふ子をほめてみる。

161

なにおも
何思ひけむ一
おもちゃ
玩具をすてておとなしく、
そば き こ すわ
わが側に来て子の坐りたる。

162

くわしもら とき わす
お菓子貰ふ時も忘れて、
かい
二階より、

まち ゆきき なが こ
町の往来を眺むる子かな。

163

あたら にほ
新しきイソクの匂ひ、
め し
目に泌むもかなしや。
には あを
いつか庭の青めり。

164

たたみ み ま
ひとつころ、畳を見つめてありし間の
おも
その思ひを、
つま かた
妻よ、語れといふか。

165

とし はる
あの年のゆく春のころ、
め くろめがね
眼をやみてかけし黒眼鏡一
こはしやしにけむ。

166

くすり わす
薬のむことを忘れて、
ひさしぶりに、
はは しか おも
母に叱られしをうれしと思へる。

167

まくらべ しやうじ
枕辺の障子あけさせて、
そら み くせ
空を見る癖もつけるかなー
なが やまひ
長き病に。

168

かちく
おとなしき家畜のごとき
こころ
心となる、
ねつ たか ひ
熱やや高き日のたよりなさ。

169

なに か
何か、かう、書いてみたくなりて、
と
ペンを取りぬー
はないけ はな あさ
花活の花あたらしき朝。

170

はな をんな
放たれし女のごとく、
つま ふるま ひ
わが妻の振舞ふ日なり。
み い
ダリヤを見入る。

171

あてもなき^{かね}金^まなどを待つ^{おも}思ひかな。
寝^ねつ^お起きつして、
け^けふ^ふくら^{くら}
今日も暮したり。

172

なに
何もかもいやになりゆく
き^きもち^{もち}
この気持よ。
おも^{おも}だ^だたはこ^{たはこ}す^す
思ひ出しては煙草を吸ふなり。

173

あ^あまち^{まち}ころ^{ころ}こと^{こと}
或る市にぬし頃の事として、
とも^{とも}かた^{かた}
友の語る
こひ^{こひ}うそ^{うそ}まじ^{まじ}
恋がたりに嘘の交るかなしさ。

174

ひさしぶりに、
こゑ^{こゑ}だ^だわら^{わら}
ふと声を出して笑ひてみぬー
はひ^{はひ}りやうて^{りやうて}も^もを^をか^か
蠅の両手を揉むが可笑しさに。

175

むね ひ
 胸いたむ日のかなしみも、
 たばこ こと
 かをりよき煙草の如く、
 す
 棄てがたきかな。

176

なに さわ おこ
 何か一つ騒ぎを起してみたかりし、
 さつき われ
 先刻の我を
 おも
 いとしと思へる。

177

さい こ なぜ
 五歳になる子に、何故ともなく、
 ろしあな
 ソニヤといふ露西亜名をつけて、
 よ
 呼びてはよろこぶ。

178

と
 解けがたき
 ふ わ み しよ
 不和のあひだに身を処して、
 け ふ いか
 ひとりかなしく今日も怒れり。

179

ねこ か
 猫を飼はば、
 ねこ あらそ たね
 その猫がまた争ひの種となるらむ、

かなしきわが^{いへ}家。

180

おれ ^{げしゆくや}
俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと、
^{けふ}
今日もあやふく、
^い
いひ出でしかな。

181

^ひ ^{わす}
ある日、ふと、やまひを忘れ、
^{うし} ^な ^ま ^ね
牛の啼く真似をしてみぬ、一
^{つまこ} ^る ^す
妻子の留守に。

182

^わ ^{もち}
かなしきは我が父！
^け ^ふ ^{しんぶん} ^よ
今日も新聞を読みあきて、
^{には} ^こ ^{あり} ^{あそ}
庭に小蟻と遊べり。

183

^{ひとり}
ただ一人の
^こ ^{われ} ^{そだ}
をとこの子なる我はかく育てり。
^ふ ^ぼ
父母もかなしかるらむ。

184

ちや た
 茶まで断ちて、
 へいふく いの
 わが平復を祈りたまふ
 はは けふ なに いか
 母の今日また何か怒れる。

185

けふ きんじよ こら あそ
 今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、
 よ きた
 呼べど来らず。
 ころむづかし。

186

い
 やまひ癒えず、
 し
 死なず、
 ひごと けは ななやつき
 日毎にころのみ険しくなれる七八月かな。

187

か
 買ひおきし
 くすり あさ き
 薬つきたる朝に来し
 とも かはせ
 友のなさけの為替のかなしき。

188

こしか
児を叱れば、
なねい
泣いて、寝入りぬ。
くちねがほ
口すこしあけし寝顔にさはりてみるかな。

189

なに
何がなしに
はいちいごとおもお
肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ一
あきちかあさ
秋近き朝。

190

あきちか
秋近し！
でんとうたま
電燈の球のぬくもりの
ゆびひふした
さはれば指の皮膚に親しき。

191

ねこまくらべ
ひる寝せし児の枕辺に
にんげうかき
人形を買ひ来てかざり、
たの
ひとり楽しむ。

192

クリストを^{ひと}人なりといへば、
妹^{いもうと}の眼^めがかなしくも、
われをあはれむ。

193

縁^{えん}先にまくら^だ出させて、
ひさしぶりに、
ゆふべの^{そら}空にしたしめるかな。

194

には^{しろ}庭のそとを白き^{いぬ}犬ゆけり。
ふりむきて、
犬^{いぬ}を飼^かはむと妻^{つま}にはかれる。

対話と感想

一利己主義者と友人との対話

B おい、おれは^{こんど}今度また引越しをしたぜ。

A さうか。君は来るたんび引越しの披露をして行くね。

B それは僕には引越し位の外に何もわざわざ披露するやうな事件が無いからだ。

A 葉書でも済むよ。

B しかし今度のは葉書では済まん。

A どうしたんだ。何日かの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。

B 莫迦なことを言へ。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目にうつらなくなつた。女より食物だね。好きな物を食つてさへ居れあ僕には不平はない。

A 殊勝な事を言ふ。それでは今度の下宿はうまい物を食はせるのか。

B 三度三度うまい物ばかり食はせる下宿が何処にあるもんか。

A 安下宿ばかりころがり歩いた癖に。

B 皮肉るない。今度のは下宿ぢやないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちやつた。

A よく自分に飽きないね。

B 自分にも飽きたさ。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。室だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食ふことにしたんだよ。

A 君のやりさうなこつたね。

B さうかね。僕はまた君のやりさうなこつたと思つてゐた。

A 何故。

B 何故つてさうぢやないか。第一こんな自由な生活はないね。居処つて奴は案外人間を束縛するもんだ。何処かへ出てゐても、飯時になれあ直ぐ家のことを考へる。あれだけでも僕みたいな者にや一種の重荷だよ。それよりは何処でも構はず腹の空いた時に飛び込んで、自分の好きな物を食つた方が可いぢやないか。(間)何でも好きなものが食へるんだからなあ。初めの間は腹のへつて来るのが楽しみで、一日に五回づつ食つてやつた。出掛けで行つて食つて来て、煙草でも喫んでるとまた直ぐ食ひたくなるんだ。

A 飯の事をさう言へや眠る場所だつてさうぢやないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寝るつても余り有難いことぢやないね。

B それはさうさ。しかしそれは仕方がない。身体一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をもつたり持つて、毎日毎日引越して歩かなくちやならないとなつたら、それこそ苦痛ぢやないか。

A 飯のたんびに外に出なくちやならないといふのと同じだ。

B 飯を食ひに行くには荷物はな。身体だけで済むよ。食ひたいなあと思つた時、ひよいと立つて帽子を冠つて出掛けるだけだ。財布さへ忘れなけや可い。ひと足ひと足うまい物に近づいて行つて気持は実に可いね。

A ひと足ひと足 ^{あたら}新しい眠りに近づいて行く ^{ゆ きもち}気持はどうだね。ああ眠くなつたと思つた時、
てくてく寝床を探しに出かけるんだ。昨夜は隣の室で女の泣くのを聞きながら眠つたつけ
が、今夜は何を聞いて眠るんだらうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋ぢや此方の誰だ
かをちつとも知らない。知つた者の一人も ^{ひとり}みない家の、行燈か何かついた奥まつた室に、
やはらかな ^{やぐ}寝具の中に ^{ゆつ}緩くり身体を延ばして安らかな眠りを待つてる ^ま気持はどうだね。

B それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A 可いだらう。毎晩毎晩 ^{まいばんまいばん}さうして新しい寝床で新しい夢を結ぶんだ(間)本も机も棄てつち
まふさ。何も ^{なに}いらぬ。本を ^よ読んだつてどうもならんぢやないか。

B ますます ^{はな}話せる。しかしそれ ^{はじ}あ話だけだ。初めの ^いうちはそれで可いかも知れないが、し
まひには ^{きつと}吃度おつくうになる。やつぱり ^{おちつ}何処かに落付いてしまふよ。

A 飯を ^く食ひに出かけるのだつてさうだよ。見給へ、二日 ^{みたま}経つと君はまた ^た何処かの ^{ど こ}下宿にこ
ろがり込むから。

B ふむ。おれは ^{さいくん}細君を持つまでは ^{とほ}今の ^み通りやるよ。吃度やつて ^み見せるよ。

A ^{さいくん}細君を持つまでか。可 ^か哀 ^{あい}想 ^{さう}に。(間)しかし ^{うらや}羨ましいね君の今のやり方は、実は ^{まへ}ずつと
前からの ^{りさう}おれの理想だよ。もう三年からになる。

B さうだらう。おれは ^{はじ}どうも初め ^{きみ}思ひ ^{おも}たつた時、君のやり ^{おも}さうな ^いこつたと思つた。

A 今でも ^{おも}やり ^いたいと思つてる。たつた一月でも可い。

B どうだ、おれん ^{ところ}処へ来て一緒に ^{しよ}やらないか。可 ^いいぜ。そして ^{も と}飽きたら以前に ^{も と}帰るさ。

A しかし ^{いや}厭だね。

B 何故。おれと一緒に ^{しよ}厭なら ^{ひとり}一人でやつても可 ^いぢやないか。

A 一緒に ^{しよ}でも一緒に ^{いま}でなくても同じことだ。君は今それを ^{おほ}始めたばかりで大いに ^{おほ}満足してるね。
僕も ^{ちが}さうに違ひない。やつぱり ^{たび}初めの ^しうちは日に五度も ^し食事をするかも知れない。しかし君
はそのうちに ^あ飽きてしまつて ^{ひろう}おつくうになるよ。さうして ^いおれん ^い処へ来て、また ^{ひろう}引越しの ^{ひろう}披露
をするよ。その時 ^{とき}おれは、「とうとう ^あ飽きたね。」と君 ^いに言ふね。

B 何だい。もうその時の ^{あいさつ}挨拶まで ^{くふう}工夫してるのか。

A まあさ。「とうとう ^あ飽きたね。」と君 ^いに言ふね。それは君 ^いに言ふのだから可 ^いい。おれは ^{そいつ}其奴
を自分 ^いには ^い言ひ ^いたくない。

B 相 ^{あひかはらずい}不 ^あ変 ^あ厭 ^あな男 ^{きみ}だなあ、君は。

A 厭 ^{いや}な男 ^{おも}さ。おれも ^{おも}さう ^{おも}思つてる。

B 君は何日か ^{いつ}一 ^{きよねん}あ ^{しよ}れは ^{いんばいや}去年 ^{とき}かな ^{とき}一 ^いおれと ^い一緒に ^い行つて ^い淫 ^い売 ^い屋 ^いから ^い逃 ^いげ ^い出 ^いした ^い時 ^いも ^いそん
な ^いこと ^いを ^い言 ^いつた。

A さう ^いだ ^いつ ^いた ^いか ^いね。

B 君は ^{きつと}吃 ^{すこ}度 ^い早 ^いく ^い死 ^いぬ。もう ^{たい}少 ^{あま}し ^{あま}気 ^{あま}を ^{あま}広 ^{あま}く ^{あま}持 ^{あま}た ^{あま}なく ^{あま}ち ^{あま}や ^{あま}可 ^{あま}かん ^{あま}よ。一 ^{あま}体 ^{あま}君 ^{あま}は ^{あま}余 ^{あま}り ^{あま}ア ^{あま}ン ^{あま}ビ ^{あま}シ ^{あま}ヤ ^{あま}ス

だから可かん。何だつて真の満足つてもものは世の中に有りやしない。従つて何だつて飽きる時が来るに定つてらあ。飽きたり、不満足になつたりする時を予想して何にもせずにもる位なら、生れて来なかつた方が余つ程可いや。生れた者は吃度死ぬんだから。

A 笑はせるない。

B 笑つてもみないぢやないか。

A 可笑しくもない。

B 笑ふさ。可笑しくなくつたつて些たあ笑はなくちや可かん。はは。(間)しかし何だね。君は自分で飽きつぽい男だと言つてるが、案外さうでもないやうだね。

A 何故。

B 相不変歌を作つてるぢやないか。

A 歌か。

B 止めたかと思ふとまた作る。執念深いところが有るよ。やつぱり君は一生歌を作るだらうな。

A どうだか。

B 歌も可いね。こなひだ友人とこへ行つたら、やつぱり歌を作るとか読むとかいふ姉さんがゐてね。君の事を話してやつたら、「あの歌人はあなたのお友達なんですか。」つて喫驚してゐたよ。おれはそんなに俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かつたね。

B 首をすくめることはないぢやないか。おれも実は最初変だと思つたよAは歌人だ！ 何んだか変だものな。しかし歌を作つてる以上はやつぱり歌人にや違ひないよ。おれもこれから一つ君を歌人扱ひにしてやらうと思つてるんだ。

A 御馳走でもしてくれるのか。

B 莫迦なことを言へ。一体歌人にしろ小説家にしろ、すべて文学者といはれる階級に属する人間は無責任なものだ。何を書いても書いたことに責任を負はない。待てよ、これは、何日か君から聞いた議論だつたね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言つたよ。文芸上の作物は巧いにしろ拙いにしろ、それがそれだけで完了してると云ふ点に於て、人生の交渉は歴史上の事柄と同じく間接だ、とか何んとか。(間)それはまあどうでも可いが、兎に角おれは今後無責任を君の特権として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌ひなんだ。何日だつけ北海道へ行く時青森から船に乗つたら、船の事務長が知つてる奴だつたものだから、三等の切符を持つてるおれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になつたらボ

- 一イを寄こしてとうとう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食ったことはない。
- B それは三等の切符を持つてみた所為だ。一等の切符さへ有れあたり前ぢやないか。
- A 莫迦を言へ。人間は皆赤切符だ。
- B 人間は皆赤切符！ やつぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込んで空樽に腰掛けるのもそれだ。
- A 何だい、うまい物うまい物つて言ふから何を食ふのかと思つたら、一膳飯屋へ行くのか。
- B 上は精養軒の洋食から下は一膳飯、牛飯、大道の焼鳥に至るさ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先刻来る時はとろろ飯を食つて来た。
- A 朝には何を食ふ。
- B 近所にミルクホールが有るから其処へ行く。君の歌も其処で読んだんだ。何でも雑誌をとつてる家だからね。(問)さうさう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言つたことがあるね。此頃その短歌滅亡論といふ奴が流行つて来たぢやないか。
- A 流行るかね。おれの読んだのは尾上柴舟といふ人の書いたのだけだ。
- B さうさ。おれの読んだのもそれだ。然し一人が言ひ出す時分にや十人か五人は同じ事を考へてるもんだよ。
- A あれは尾上といふ人の歌そのものが行きづまつて来たといふ事実立派な裏書をしたものだ。
- B 何を言ふ。そんなら君がああ議論を唱へた時は、君の歌が行きづまつた時だつたのか。
- A さうさ。歌ばかりぢやない、何もかも行きづまつた時だつた。
- B しかしあれには色色理屈が書てあつた。
- A 理屈は何にでも着くさ。ただ世の中のことは一つだつて理屈によつて推移してみないだけだ。たとへば、近頃の歌は何首或は何十首を、一首一首引き抜いて見ないで全体として見るやうな傾向になつて来た。そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか。一分分解して現す必要が何処にあるか、とあれに書いてあつたね。一応尤もに聞えるよ。しかしあの理屈に服従すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は一文学は作家の個人性の表現だといふことを狭く解釈してるんだからね。仮に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌ふにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で、一分は六十秒だよ。連続してゐるが初めから全体になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで来る感じを後から後からときれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか。一つに纏める必要が何処にあると言ひたくなるね。

- B 君はさうすつと歌は永久に滅びないと云ふのか。
- A おれは永久といふ言葉は嫌ひだ。
- B 永久でなくても可い。兎に角まだまだ歌は長生すると思ふのか。
- A 長生はする。昔から人生五十といふが、それでも八十位まで生きる人は沢山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。
- B 何日になつたら八十になるだらう。
- A 日本の国語が統一される時さ。
- B もう大分統一されかかつてゐるぜ。小説はみんな時代語になつた。小学校の教科書と詩も半分はなつて来た。新聞にだつて三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使ふ人さへある。
- A それだけ混乱してみたら沢山ぢやないか。
- B うむ。さうすつとまだまだか。
- A まだまだ。日本は今三分の一まで来たところだよ。何もかも三分の一だ。所謂古い言葉と今の口語と比べて見ても解る。正確に違つて来たのは、「なり」「なりけり」と「だ」「である」だけだ。それもまだまだ文章の上では併用されてゐる。音文字が採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰される時が来なくちや歌は死なない。
- B 気長い事を言ふなあ。君は元来性急な男だつたがなあ。
- A あまり性急だつたお蔭で気長になつたのだ。
- B 悟つたね。
- A 絶望したのだ。
- B しかし兎に角今の我々の言葉が五とか七とかいふ調子を失つてゐるのは事実ぢやないか。
- A 「いかにさびしき夜なるぞや。」「なんてさびしい晩だらう。」どつちも七五調ぢやないか。
- B それは極めて稀な例だ。
- A 昔の人は五七調や七五調でばかり物を言つてゐたと思ふのか。莫迦。
- B これでも賢いぜ。
- A とはいふものの、五と七がだんだん乱れて来てるのは事実だね。玉が六に延び、七が八に延びてゐる。そんならそれで歌にも字あまりを使へば済むことだ。自分が今迄勝手に古い言葉を使つて来てゐて、今になつて不便だもないぢやないか。成るべく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纏りかねたら字あまりにするさ。それで出来なければ言葉や形が古いんでなくつて頭が古いんだ。
- B それもさうだね。
- A のみならず、五も七も更にことか三とか四とかにまだまだ分解することが出来る。歌の

調子はまだまだ複雑になり得る余地がある。昔は何日の間にか五七五、七七と二行に書くことになつてみたのを、明治になつてから一本に書くことになつた。今度はあれを壊すんだね。歌には一首一首各異つた調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B さうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A 人は歌の形は小さくて不便だといふが、おれは小さいから却つて便利だと思つてゐる。さうぢやないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまへは間もなく忘れるやうな、乃至は長く忘れずにゐるにしても、それを思ひ出すには余り接穂がなくてとうとう一生思ひ出さずにしまふといふやうな、内から外からの数限りなき感じを、後から後からと常に経験してゐる。多くの人はそのを軽蔑してゐる。軽蔑しないまでも殆ど無関心にエスケープしてゐる。しかしいのちを愛する者はそれを軽蔑することが出来ない。

B 待てよ。ああさうか一分は六十秒なりの論法だね。

A さうさ。一生に二度とは帰つて来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。実際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。(間)おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。(間)しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ、早く滅亡すれば可いと思ふがまだまだ。(間)日本はまだ三分の一だ。

B いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A (間)おれはしかし、本当のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B どういふ意味だ。君はやつぱり歌人だよ。歌人だつて可いぢやないか。しつかりやるさ。

A おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛してゐる。

B 解らん。

A 解らんかな。(間)しかしこれは言葉でいふと極くつまらんことになる。

B 歌のやうな小さいものに全生命を託することが出来ないといふのか。

A おれは初めから歌に全生命を託さうと思つたことなんかない。(間)何にだつて全生命を託することが出来るもんか。(間)おれはおれを愛してはゐるが、其のおれ自身だつてあまり信用してはゐない。

B (やや突然に) おい、飯食ひに行かんか。(間、独語するやうに。)おれも腹のへつた時はそんな氣持のすることがあるなあ。

歌のいろいろ

(一)

○日毎ひごとに集つて来る投書うたよの歌めうを読んでみて、ひよいと妙な事を考へさせられることがある。一此処このころに作者その人に差障りさしざはを及ぼさない範囲はんあに於て一二の例を挙げて見るならば、此頃このころになつて漸く手やうやを着けた十月ちうたうちやく中到着なながしくんの分ひとの中に、神田の某君ふたといふ人の半紙二つをり折へ横かに二十首の歌を書いて、『我目下の境遇』と題を付けたのがあつた。

○読んでみて私は不思議じやうずに思つた。それは歌の上手な為ためではない。歌は字と共に寧ろ拙ともかつた。又その歌つてある事むしの特まつに珍らしい為ことでもなかつた。私ふしぎを不思議に思はせたのは、脱字だつじの多い事ことである。誤字ごじや仮名違かなちがひは何百といふ投書家うちの中に随分やる人ひとがある。寧ろ驚く位むしある。然し恁麼くらあに脱字このなの多いのは滅多だつじにない。要らぬ事いとは思ひながら数へてみると、二十首だつじの中に七箇所かじよの脱字があつた。三首だつじに一箇所かじよの割合である。

○歌つてある歌には、母が病気ふになつて秋風きが吹いて来たといふのがあつた。僻心ひがみごころを起すのは悪い悪いと思ひながら何時いつしか夫それが癖くせになつたといふのがあつた。十八としの歳から生活しの苦しみを知つたといふのがあつた。安らかに眠つてゐる母の寝顔やすを見れば涙なみだが流れるといふのがあつた。弟おとの無邪気むじやきなのを見て傷みんでゐる歌もあつた。金かねといふものに数々の怨みかずかずを言つてゐるのもあつた。終日うらの仕事しうじつの疲れといふことを歌つたのもあつた。

○某君なながしくんは一体たいに粗忽そつつかしい人なのだらうか？小学校だつじにゐた頃けいすうから脱字だつじをしたり計数けいすうを間違つたり、忘れ物くせをする癖このなのあつた人なのだらうか？一恁麼事とを問うてみるからが既に勝手かつてな、作者したがに対して失礼またかつてな推量またかつてで、随つてその答へも亦勝手な推量またかつてに過ぎないのだが、私には何うもさうは思へなかつた。進むべき路きやうぐうを進みかねて境遇ぎせいの犠牲となつた人の、その心げんきに消しがたき不平ひとさきが有れば有る程おとろ、元氣も顔色も人先かうんに衰へて、幸運な人がこれから初めて世としごの中に打つて出ようといふ歳頃はやに、早く既に医すしがたき神経衰弱いに< > 陥おちいつてゐる例は、私の知つてゐる範囲ふたりにも二人にんや三人としではない。私は「十八の歳から生活の苦しみを知つた人」と「脱字を多くする人」とを別々に離して考へることは出来なかつた。

○某君なながしくんのこの投書は、多分何か急がしい事のある日か、心の落付かぬ程嬉しい事でも

ある日に書いたので、斯う脱字が多かつたのだらう。さうだらうと私は思ふ。然し若し此処に私の勝手に想像したやうな人があつて、某君の歌つたやうな事を誰かの前に訴へたとしたならば、その人は果して何と答へるだらうか。

○私は色々の場合、色々の人のそれに対する答へを想像して見た。それは皆如何にも尤もな事ばかりであつた。然しそれらの叱咤それらの激励、それらの同情は果して何れだけその不幸なる青年の境遇を変へてくれるだらうか。のみならず私は又次のやうな事も考へなければならなかつた。二十首の歌に七箇所しち箇所の脱字をする程頭の悪くなつてゐる人ならば、その平生の仕事にも「脱字」が有るに達ひない。その処世の術にも「脱字」があるに達ひない。一私の心はいつか又、今の諸々の美しい制度、美しい道德をその儘長く我々の子孫に伝へる為には、何れだけの夥しい犠牲を作らねばならぬかといふ事に移つて行心持になつて次の投書の封を切つた。

(二)

○大分前の事である。茨城だつたか千葉だつたか乃至は又群馬の方だつたか、何しろ東京から余り遠くない県の何とか郡何とか村小学校内某といふ人から歌が来た。何日か経つて其の歌の中の何首かが新聞に載つた。すると間もなく私は同じ人からの長い手紙を添へた二度目の投書を受け取つた。

○其の手紙は候文と普通文とを捏ね交ぜたやうな文体で先づ自分が「憐れなる片田舎の小学教師」であるといふ事から書き起してあつた。さうして自分が自分の職務に対し兎角興味を有ち得ない事、誰一人趣味を解する者なき片田舎の味気ない事、さうしてる間に予々愛読してゐる朝日新聞に歌壇の設けられたので空谷の聲音と思つたといふ事、近頃は新聞が着くと先づ第一に歌壇を見ろといふ事、就いては今後自分も全力を挙げて歌を研究する積だから宜しく頼む。今日から毎日必ず一通づゝ投書するといふ事が書いてあつた。

○此の手紙が宛名人たる私の心に惹起した結果は、蓋し某君の夢にも想はなかつた所であらうと思ふ。何故なれば、私はこれを読んでしまつた時、私の心に明かに一種の反感の起つてゐる事を発見したからである。詩や歌や乃至は其の外の文学にたづさはる事を、人間の他の諸々の活動よりも何か格段に貴い事のやうに思ふ迷信一それは何時如何なる人の口から出るにしても私の心に或反感を呼び起さずに済んだことはない。「歌を作ることをを何か偉い事でもするやうに思つてる、莫迦な奴だ。」私はさう思つた。さうして又成程自ら言ふ如く憐れなる小学教師は仮名違ひも文法の違ひもあつた。

○然しその反感も直ぐと引込まねばならなかつた。「羨ましい人だ。」といふやうな感じが軽く横合から流れて来た為めである。此の人は自分で自分を「憐れなる」と呼んではゐるが、如何に憐れで、如何にして憐れであるかに就いて真面目に考へたことのない人、寧ろさういふ考へ方をしない質の人であることは、自分が不満足なる境遇に在りながら全力を挙げて歌を研究しようなどと言つてゐる事、しかも其歌の極平凡な叙事叙景の歌に過ぎない事、さうして他の營々として刻苦してゐる村人を趣味を解せぬ者と嘲つて僅に喜んでゐるらしい事などに依て解つた。己の為る事、言ふ事、考へる事に対して、それを為ながら、言ひながら、考へながら常に一々反省せずにおられぬ心、何事にまれ正面に其問題に立向つて底の底まで究めようとせずにゐられぬ心日毎々々自分自身からも世の中からも色々な不合理と矛盾とを発見して、さうして其の発見によつて却て益自分自身の生活に不合理と矛盾とを深くして行く心一さういふ心を持たぬ人に対する羨みの感は私のよく経験する所のものであつた。

○私はとある田舎の小学校の宿直室にごろごろしてゐる一人の年若き准訓導を想像して見た。その人は真に人を怒らせるやうな悪口を一つも胸に蓄へてゐない人である。漫然として教科書にある文の字句を生徒に教へ、漫然として自分の境遇の憐れな事を是認し、漫然として今後大に歌を作らうと思つてゐる人である。未だ嘗て自分の心内乃至身辺に起る事物に対して、その根ざす処如何に深く、その及ぼす所如何に遠きかを考へて見たことのない人である。日毎に新聞を読みながらも、我々の心を後から後からと急がせて、日毎に新しく展開して来る時代の真相に対して何の切実な興味をも有つてゐない人である。私はこの人の一生に快よく口を開いて笑ふ機会が、私のそれよりも吃度多いだらうと思つた。

○翌日出社した時は私の頭にもう某君の事は無かつた。さうして前の日と同じ色の封筒に同じ名を書いた一封を他の投書の間に見つけた時、私はこの人が本当に毎日投書する積なのかと心持眼を大きくして見た。其翌日も来た。其又翌日も来た。或時は投函の時間が遅れたかして一日置いての次の日に二通一緒に来たこともあつた。「また来た。」私は何時もさう思つた。意地悪い事ではあるが、私はこの人が下らない努力に何時まで飽きずにゐられるかに興味を有つて、それとはなしに毎日待つてゐた。

○それが確七日か八日の間続いた。或日私は、「とうとう飽きたな。」と思つたその次の日も来なかつた。さうして其後既に二箇月、私は再び某君の墨の薄い肩上りの字を見る機会を得ない。来ただけの歌は随分夥しい数に上つたが、ただ所謂歌になりさうな景物を漫然と三十一字の形に表しただけで、新聞に載せるほどのものは殆どなかつた。

○私は今この事を書いて来て、其後某君は何うしてゐるだらうと思つた。矢張新聞が着

けばたゞ文芸欄や歌壇や小説許りに興味を有つて読んでゐるだらうか。漫然と歌を作り出して漫然と罷めてしまつた如く、更に又漫然と何事かを始めてゐるだらうか。私は思ふ。若し某君にて唯一つの事、例へば自分で自分を憐れだといつた事に就いてゞも、その如何に又如何にして然るかを正面に立向つて考へて、さうして其処あるうごに或動かすべからざる隠れたる事実を承認する時、其某君の歌は自からにして生氣ある人間の歌になるであらうと。

(三)

〇うつかりしながら家の前まで歩いて来た時、出し抜けに飼ひ犬に飛着かれて、「あゝ喫驚びつくりした。こん畜生！」と思はず知らず口に出す一といふやうな例はよく有ることだ。下らない駄酒落だじやれを言ふやうだが、人は喫驚びつくりすると悪口を吐きたがるものと見える。「こん畜生」と言はなくとも、白なら白、ポチならポチで可いではないか一若し必ず何とか言はなければならぬのならば。

〇土岐哀果君さうさくが十一月の「創作なんしゆ」に発表した三十何首の歌は、この人がこれまで人の褒貶はうへん どぐわいを度外かいたくに置いて一人で開拓して来た新しい畑あきに、漸く楽しい秋きの近づいて来てゐることを思はせるものであつた。その中に、

やけれんぐわ
焼あとの煉瓦の上に

Syobenをすればしみじみ
秋の気がする

といふ一首しゆがあつた。好い歌だと私は思つた。(小便わぎわざといふ言葉だけを態々羅馬字ローマで書いたのは、作者の意味では多分この言葉を在来の漢字で書いた時に伴つて来る悪い連想こぼを拒む為であらうが、私はそんな事をする必要はあるまいと思ふ。)

〇さうすると今月になつてから、私は友人の一人から、或雑誌が特にこの歌を引いて土岐君の歌風のゝを罵りつてゐるといふ事を聞いた。私は意外に思つた勿論この歌が同じ作者の歌の中で最も優れた歌といふのではないが、然し何度読み返して見ても悪い歌にはならない。評者は何故この鋭い実感を承認することが出来なかつたであらうか。さう考へた時、私は前に言つた「こん畜生」の場合を思ひ合せぬ訳に行かなかつた。評者は吃度歌きつとといふものに就いて或狭い既成概念を有つてゐる人に違ひない。自ら新しい歌の鑑賞家を以て任じてゐ乍ら、何時となく歌は漸ういふもの、斯くあるべきものといふ保守的な概念かたちづくを形成つてさうしてそれとらに捉は)る人に違ひない。其処へ生垣すきまの隙間から飼犬の飛び出したやうに、小便といふ言葉が不意に飛び出して来て、その保守的な、苟安的な既成概念こうあんてきの袖そでにむづと噛み着いたのだ。然し飼犬が主人の帰りを喜んで飛び着くに何の不思議もない如く、我々の平生使つてゐる言葉が我々の歌に入つて来たとして何も吃驚するには当らないではない

か。

○私の「やとばかり桂首相に手とられし夢みて覚めぬ秋の夜の二時」といふ歌も或雑誌で土岐君の小便の歌と同じ運命に会つた。尤もこの歌は、同じく実感の基礎を有しながらも桂首相を夢に見るといふ極稀なる事実を内容に取り入れてあるだけに、言ひ換へれば万人の同感を引くべく余りに限定された内容を歌つてあるだけに、小便の歌ほど歌としての存在の権利を有つてゐない事は自分でも知つてゐる。

○故独歩は嘗てその著名なる小説の一つに「驚きたい」と云ふ事を書いてあつた。その意味に於ては私は今でも驚きたくないことはない。然しそれと全く別な意味に於て、私は今「驚きたくない」と思ふ。何事にも驚かずに、眼を大きくして正面にその問題に立向ひたいと思ふ。それは小便と桂首相に就いてのみではない、又歌の事に就いてのみではない。我々日本人は特殊なる歴史を過去に有してゐるだけに、今正に殆どすべての新しい出来事に対して驚かねばならぬ境遇に在る。さうして驚いてゐる。然し日に百回「こん畜生」を連呼したとて、時計の針は一秒でも止まつてくれるだらうか。

○歴史を尊重するは好い。然しその尊重を逆に将来に向つてまで維持しようとして一切の「驚くべき事」に手を以て蓋をする時、其保守的な概念を厳密に究明して来たならば、日本が嘗て議を開いた事から先づ国体に抵触する訳になりはしないだらうか。我々の歌の形式は万葉以前から在つたものである。然し我々の今日の歌は何処までも我々の今日の歌である。我々の明日の歌も矢つ張り何処までも我々の明日の歌でなくてはならぬ。

(四)

○机の上に片肘をついて煙草を吹かしながら、私は書き物に疲れた眼を置時計の針に遊ばせてゐた。さうしてこんな事を考へてゐた。一凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて来た時、我々はその不便な点に対して遠慮なく改造を試みるが可い。またさう為るのが本当だ我々は他の為に生きてゐるのではない、我々自身の為に生きてゐるのだ。

○たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて来た。其処でこれは歌それぞれの調子に依つて、或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子そのものを破ると言はれるにしてからが、その在来の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて来たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどしどし字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかい

ふ勝手な拘束こうそくを罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活せつなせつなの間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じあいせきを哀惜する心が人間にある限りかり、歌といふものは滅びない。仮に現在の三十一文字文字もじもじになるにしても、兎に角ほろ歌といふものは滅びない。さうして我々はそれに依つて、その刹那々々の生命せつなせつな いのちを哀惜あいせきする心を満足できさせることが出来る。

○こんな事を考へて、恰度秒針ちやうどべうしんが一回転する程の間、私は凝然ぢつとしてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。一私の不便を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺つぼ ぬちの位置と、それから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の真に私に不便を感じさせ、苦痛を感じさせるいろいろの事に対しては、一指をも加へることが出来ないではないか。否、それに忍従にんじゆうし、それに屈伏くつぷくして、惨ましき二重の生活を続けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に弁解しては見るものゝ、私の生活は欠張現在の家族制度、階級制度資本制度、知識売買制度の犠牲である。

○日移して、死んだものゝやうに畳の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。

土岐京果

石川は遂に死んだ。それは明治四十五年四月十三日の午前九時三十分であつた。

その四五日前のことである。金がもう無い、歌集を出すやうにしてくれ、とのことであつた。で、すぐさま東雲堂へ行つて、やつと話がまとまつた。

うけとつた金を懐にして電車に乗つてゐた時の心もちは、今だに忘れられない。一生忘れられないだらうと思ふ。

石川は非常によろこんだ。氷嚢の下から、どんよりした目を光らせて、いくたびもうなづいた。

しばらくして、「それで、原稿はすぐ渡さなくてもいいのだらうな、訂さなくちやならないところもある、癒つたらおれが整理する」と言つた。その声は、かすれて聞きとりにくかつた。

「それでもいいが、東雲堂へはすぐ渡すといつておいた、」と言ふと、「さうか」と、しばらく目

を閉ぢて、無言であた。

やがて、枕もとにあた夫人の節子さんに、「おい、そのノートをとつてくれ、一その陰気な、」とすこし上を向いた。ひどく痩せたなアと、その時僕はおもつた。

「どのくらゐある？」と石川は節子さんに訊いた。一ページに四首つゝで五十頁あるから四五の二百首ばかりだと答へると、「どれ、」と、石川は、その、灰色のラシャ帋の表帋をつけた中版のノートをうけとつて、ところど披いたが、「さうか。では、万事よろしくたのむ。」と言つて、それを僕に渡した。

それから石川は、全快したら、これこれのことをすると、苦しさに、しかし、笑ひながら語つた。

かへりがげに、石川は、襖を閉めかけた僕を「おい呼びとめた。立つたまゝ「何だい」と訊くと、「おいこれからも、たのむぞ、」と言つた。

これが僕の石川に物をいはれた最後であつた。

石川は死ぬ、さうは思つてみたが、いよいよ死んで、あとの事を僕がするとなると、実に変な気がする。

石川について、言ふとなると、あれもこれも言はなければならない。しかし、まだ、あまり言ひたくない。もつと、じつとだまつて、かんがへてゐたい。実際、石川の、二十八年の一生をかんがへるには、僕の今までがあまりに貧弱に思ほれてならないのである。

しかし、この歌集のことについては、も少し書いておく必要がある。

これに収めたのは、大てい雑誌や新聞に掲げたものである。しかし、ここにはすべて「陰気」なノートに依つた。順序、句読、行の立て方、字を下げるところ、すべてノートのままである。たゞ最初の二首は、その後帋片に書いてあつたのを発見したから、それを入れたのである。第九十頁に一首空けてあるが、ノートに、あすこで頁が更めてあるから、それもそのまゝにした。生きてゐたら、訂したいところもあるだらうが、今では、何とも仕やうがない。

それから、「一利己主義者と友人との対話」は創作の第九号(四十三年十一月発行)に掲げたもの、「歌のいろいろ」は朝日歌壇を選んでゐた時、(四十三年十二月前後)東京朝日新聞に連載したものである。この二つを歌集の後へ附けることは、石川も承諾したことである。

表題は、ノート的第一頁に「一握の砂以後明治四十三年十一月末より」と書いてあるから、それをそのまま表題にしたいと思つたが、それだと「一握の砂」とまぎらはしくて困ると東雲堂でいふから、これは止むをえず、感想の最後に「歌は私の悲しい玩具である」とあるのをとつてそれを表題にした。これは節子さんにも伝えておいた。あの時、何とするか訊いておけばよかつたのであるが、あの寝姿を前にして、全快後の計画を話されてはもう、そんなことを訊けなかつた。(四十五年六月九日)

明治四十五年六月十五日印刷

明治四十五年六月二十日発行

著者 石川 一

発行者 西村寅次郎

印刷者 岡田鍊一

発行所 東雲堂書店

■このファイルについて

【標題】悲しき玩具

【著者】石川啄木

【本文】「悲しき玩具」 明治45年6月20日発行(初版)

精選 名著復刻全集 近代文学館 昭和57年4月1日 発行

【参照】●啄木全集 第一巻 歌集

1967年6月30日 初版第一刷発行

1972年6月30日 初版第六刷発行

●啄木全集 第四巻 評論・感想

1967年9月30日 初版第一刷発行

1972年3月30日 初版第五刷発行

発行所 筑摩書房

●直筆ノート

昭和五十五年 啄木忌 複製

〔発行〕盛岡啄木会

〔異同〕

(1) 次の二首は、直筆ノートには載っていません。

(原稿用紙の半片に書かれています。)

1

呼吸すれば、

胸の中にて鳴る音あり。

こがらし
凧 よりもさびしきその音！

2

眼閉づれど、

心にうかぶ何もなし。

さびしくもまた眼をあけるかな。

(2) 最後の194首目の後に、次のような歌の断片が書かれています。

大股に縁側を歩けば、

【表記】原文の表記を尊重しつつ、Webでの読みやすさを考慮して、以下のように扱います。

- 旧字体は、現行の新字体に変えました。新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。
- 本文のかなづかいは、底本通りとしました。
- 底本通り総ルビをふりました。
- 歌と歌の間に「*」がありますが、省略しました。
- 原文で使われている「く」形(＼／)の反復記号は用いず、同語反復で表記しました。
- 歌番号を追加しました。

【制作】 [里実文庫](#)

【公開】 2009年4月